

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百三十五号

原告団レポート

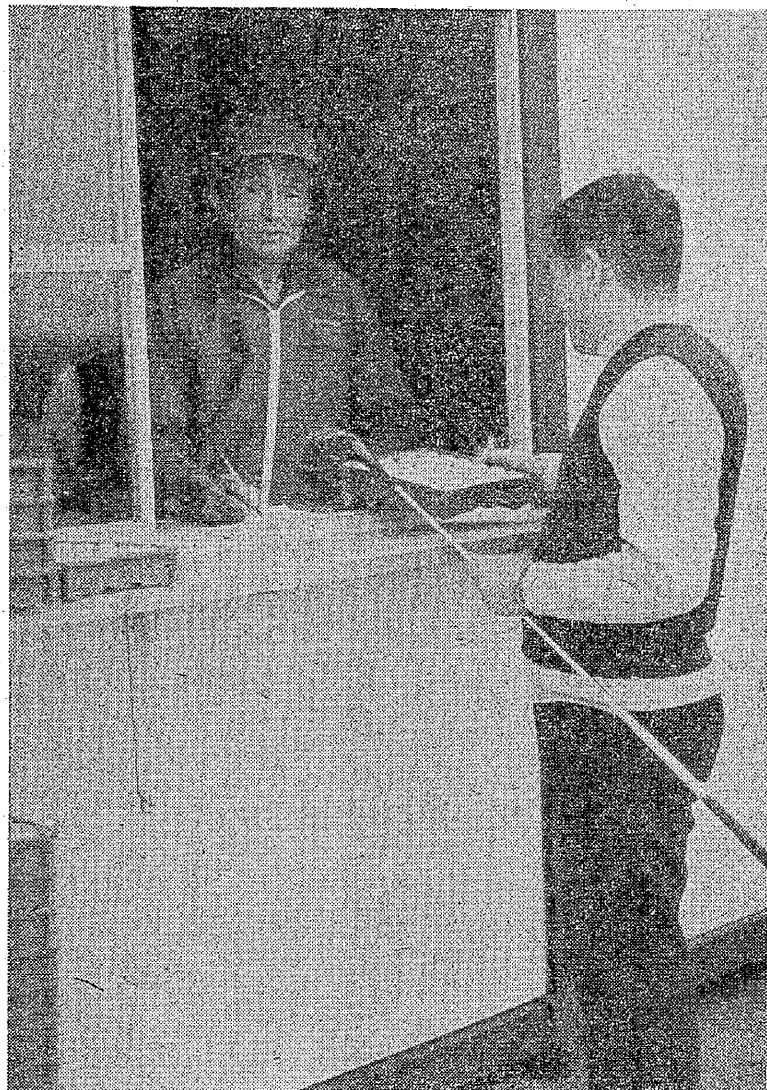
CO患者——
塚本 清 さん

向きな仕事

三井グリーンランド・ゴルフ場は、荒尾市の東部にある。丘陵が起伏する広大な地帯をひとりで占めて、三井が経営するグリーンランド(遊園地)の西南端の一隅に設けられている。

それ自体がびくびくするほど広く、ゴルフ場はゆるやかな丘をいくつも重ね合わせながら、はるか彼方にまで広がっている。たずねた日は冬のまんなかだというのに、太陽がひとまわり輝きわたって、ゴルフ場は不思議なほどほかほかと暖かい日につつまれていた。

芝を敷きつめた丘陵のそこかしこにちらほらと、ゴルフに興ずる人影が豆つぶほど小さく見られたが、三池大爆発に被災したCO患者の一人、塚本清さんは、大石清さん、堀分文三さんという同じ患者仲間と三人で、ゴルフ場にタマ拾いとして働いているのである。



ゴルフ場の塚本さん。この日気嫌がよかつたか、ニコニコしていた。にわかお客さん(前川書記次長)に、窓口からゴルフのタマを差し出す。毎日がこの調子ならいいのだが、そうはいかないのがこの病気だ。

「自覚症状」頭重。神経症状「筋緊張、左上肢反射亢進、精神症状」情動障害、受動的、やや不活発。脳波「軽度異常。その他」難聴、時に発熱……」

人間として何かをしよとの気持ちが見られず、もちろんハガキ一枚書くこともない。それだから

求めた被災

塚本さんは明治四十二年一月四日生れだから満七十七歳だ。三池大爆発に被災したのは、五十四歳のとき。あと二カ月足らず

今はゴルフの玉拾い

休みの日には、ただぼさーっというだけ

前は心の暖い人だった

カルテから

四十三年四月十五日付のカルテには、彼の症状について次のようなことが記されている。

「自覚症状」頭重。神経症状「筋緊張、左上肢反射亢進、精神症状」情動障害、受動的、やや不活発。脳波「軽度異常。その他」難聴、時に発熱……」

まさにカルテの通りで、身の回りのできごとすべてに無関心だ。たとえどんな人がたずねてきようと、これという喜怒哀楽の反応が見られず、休みの日など家で一日を過ごすにしても、ただぼさーっというばかり。

人間として何かをしよとの気持ちが見られず、もちろんハガキ一枚書くこともない。それだから

こんな塚本さんなのに、昭和四十一年十月末日をもって、「症状が平衡状態となり、医療効果が期

待できない」からという口実で、政府により労災補償を打ち切られたのである。

本来の人間

もともと塚本さんは、こんな人間ではなかった。なるほど家庭の事情から、もの心も十分でないうちに、早くも世間の冷たい風をなかに、仕事を求めて出なければならなかった。三川鉦に、探炭工として入社した昭和十五年こそ三十一歳になっていたものの、とある鍛冶屋に初めて奉公に出たのが大正十年、わずか十二歳のときだったことを思えば、その後彼がなめ続けてきた辛酸は並たいていのものではなかったろう。

しかも、三池大爆発二年前の三十三年に先妻と死別している。だからいまの妻の栄子さんは後妻ということになるが、でもこの辛酸は決して塚本さんにとって無駄ではなかったはずで、妻の栄子さんは語るのだから。

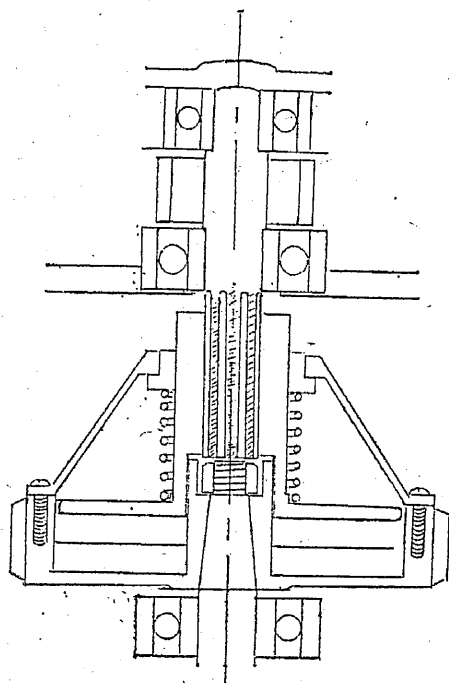
「苦勞のなかにをくり抜けてきた人だからでしょうが、被災前のお父さんはとても心の暖い人でした」

再発申請へ

きちんとした字を書き、家のこととはいへば何でもひき受けてやってくれた。三井鉦山からもらった表彰状や記念品が、保存されているものだけでも六種類。

兵役に服しているときも、中隊長から「特別試合(銃剣道)ニ於テ其成績優秀ニ付愛ニ之ヲ賞ス」との表彰状を受けている。そんな彼が、精いっぱいできる仕事で、今はゴルフ場のタマ拾い。報酬は、日給千四百八十円也。

塚本さんは今労働省に、再発申請を提出、救済を求めているがここにもまたその人間を骨抜きにされてしまった、不幸なCO患者がひとり。



塚本さんの趣味は、機械設計だった。暇さえあれば図面をかいた。「定年後は、これでめしを食うぞ」が唯一の夢だったのだ。(図面は、何十枚と残されたもののなかの一つ)

とんだ失敗

塚本さんには二男一女と、それに一人の養子があるが、東京で身を立てている長男の正志さんの結婚式のときのこと。

彼は父親として式にのぞむため妻の栄子さんと実妹・日満ハツエさん(荒尾市西原居住)といっしょに上京した。

東京駅に着いたところに、約束通り正志さんが父親一行を迎えるためにやってきた。

例のようにぼさーっとしていた父親に、「お父さん」と呼びかけながら肩をたたいた。ふり返って、いよいよ晴れの日を迎えたいが子の顔を上げしげと見つめていた塚本さん、「あんた、だれですか」。

妻の栄子さんに聞けば、正志さんはその年の正月に帰省、数日間を両親とともに過ごしたばかりだったから、妻の栄子さんもさすがにあきれがらかった。

「お父さん、いよいよ結婚式を挙げるわが息子に、あんただれですかはないでしょう」。

「なまけな息子な、子どものときは、彼の症状について次のようなことが記されている。」